

日本語地図課題対話における名詞の引用

川端 良子[†]

Yoshiko Kawabata

[†] 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics
kawabata@ninjal.ac.jp

概要

会話の参加者にとって非共有知識の対象を、会話の中で参照する場合には、名詞の後に「って」や「という」のような引用形式が用いられるという従来の説を日本語地図課題対話コーパスを用いて検証する。
キーワード：参照表現, 共有知識, 引用, 文脈

1. はじめに

日本語では、話し手が聞き手のどちらかが名詞の意味や指示対象を知らない場合、名詞を裸のままでは使用できず「って」や「という」などの引用形式を用いなければならないと言われている [1, 3]。この規則の会話内での制約について、田窪 [1] は次のやりとりを挙げて説明している。

- (1) 1 A 僕の友人に田中という奴がいます。まじめだし、英語がよくできるので適任だと思いますが。
2 B その人は独身ですか。じゃ、その田中という人に頼んでください。
3 A じゃ、田中君に頼みます。
- (田窪 [1],p.219)

裸の固有名は共有の知識であることを示す。そのため、A が友人の田中氏を、田中氏のことを知らない B との会話に導入するときには、上記 (1) の 1 行目のように「という」等を用いて言語の意味や指示対象ではなく、記号自体を指す必要がある (「メタ用法」)。B は、相手が「田中」と呼ぶ人物が存在することは分かるが、その要素を特定できないためメタ用法が維持される (2 行目)。ただし、A は田中氏を同定できるのに対して、B は同定することができない。この違いにより要素を会話に導入した後、A は「田中」で対象を指すことができるのに対し (3 行目)、B は「田中さん」とは呼べないとしている。この差は、会話が終了するか、会話中になんらかの意味で直接経験するまで継続するとしている。田窪の議論は直感的には妥当に感じられるが、実際のデータによる理論の検証は管見の限り行われていない。そこで本研究は、『日本語地図課題対話コーパス』[4] を用いて、対話参加者の知識とメタ用法の使用について分析する。

2. 方法

日本語地図課題対話コーパス (マップタスク)[4] は、二人の実験参加者のうち、経路が描かれた地図を渡された参加者 (Giver) が、経路が描かれたいない地図を渡されたもう一方の参加者 (Follower) に経路の指示を行い、Giver の地図に描かれた経路を Follower の地図上に再現する課題の遂行中に行なわれた言語活動が収録されている。両者に渡される地図には複数のランドマークが配置され、経路を説明する際に参照されるように設計されている。ランドマークは、Giver と Follower の地図の配置パターンにより 4 つの条件がある。(1) Giver と Follower の両者の地図に共通に存在する「共有条件」、(2) 一方の地図にのみ存在する「有無条件」、(3) Giver には 2 つあり、Follower には 1 つしかない「2to1 条件」、(4) 同じ位置に同じ図があるものの名称が異なっている「名称変更条件」である。各条件は、対話参加者の対象への知識に差を生じさせている。本稿は、引用形式がどのような状況において使用されるかを (1) 共有条件と (2) 有無条件の 2 条件で比較し、使用傾向を検討する。

2.1 データ

分析は、日本語地図課題対話 128 対話中の 32 対話を用いた (表 1)。

表 1 分析データ

データ数	32 対話
親近性	あり:16 対話, なし:16 対話
コード No.	j1n[1-8], j2n[1-8], j3n[1-8], j3n[1-8]
視認条件	視認不可能条件

2.2 アノテーション

会話中からランドマークを参照している箇所をすべて抽出し、それぞれについて引用形式の有無の判定を行った。引用形式とはランドマークの名前の後に「(っ)

て」「とは」「と(か)いう」が後続するものとする。ただし、ランドマークの文字を参照する場合(「死火山って書いてある所」など)はその他に分類をした(表2)。

表 2 分類の種類

分類	説明(例)
引用有	ランドマークに引用形式が後続するもの(石の砂漠って、砂漠というの、その石の砂漠って)
引用無	ランドマークの後に引用形式が後続しないもの(石の砂漠、砂漠)
その他	上記以外(それ、その図、それって、砂漠って字)

3. 結果

表3は共有条件、表4は有無条件の結果を示している。有無条件の「話者」列は、自分の地図にランドマークがあり相手の地図にない場合を「KU」、自分の地図にランドマークがなく相手の地図にある場合を「UK」で示している。

表3に示されているように、共有条件では、対象を2回以上参照する場合は、引用無の形式が使用されており、田窪の説と一致する。

一方、表4の有無条件では、2回以上参照する場合、KUの話者の方が引用形式を用いており、田窪の説から予想される結果と異なっていた。

表 3 共有条件 (Known-Known) の頻度 (%)

回数	引用有	引用無	その他
1	67 (27.0)	180 (72.6)	1 (0.4)
2~	38 (2.3)	1533 (91.1)	112 (6.7)

表 4 非共有条件 (Known-UnKnown) の頻度 (%)

話者	回数	引用有	引用無	その他
KU	1	47 (29.6)	110 (69.2)	2 (1.3)
	2~	32 (14.2)	169 (74.4)	25 (11.0)
UK	1	0 (0.0)	2 (100.0)	0 (0.0)
	2~	16 (7.1)	175 (78.1)	33 (14.7)

4. 考察

メタ用法が使用された発話を調べると、ランドマークを知っている話者の場合は「ある」「いる」などの存在動詞が使用される場合が多く(表5)、ランドマークを知らない話者の場合は述語が否定「ない」であるかランドマークの説明を求める発話が多い(表6)。

メタ用法¹について丹羽[3]は、2つの方向で用いられるとしてしており、その一つが「述部で意味・指示

¹丹羽は正確には「メタ言語機能的用法」と呼んでいる。

表 5 対象を知っている話者 (KU) のメタ用法の例

(1)	大体十五センチ位んところに二艘のカヌーてゆう図があるのね。
(2)	その岩場でゆう絵の端っからまた大体三センチ位右側に行くと酒場でゆう絵があんのね。
(3)	墓地てゆうのがあって。
(4)	要するにあのここねちょっと何かあるんだよストーンサークルてゆうのあるんだよね。
(5)	えとねぶなの林の下に礼拝堂てあるんですね。

表 6 対象を知らない話者 (UK) のメタ用法の例

(1)	山てのが載ってないんですけど。
(2)	その牧場でゆうのは無いから。
(3)	今度二艘のカヌーてのがこっちに無いんですけど。
(4)	牧場とはどこら辺にあるんでしょうか。
(5)	丸い岩とゆうのはどこら辺に。
(6)	その鉄橋て言うのはその川を渡ってるんだよね?。

対象を問い・与えるという方向である。」(p.81)と述べている。表5の用例は、指示対象を与えており、表6の用例は、指示対象を問うているといえるので、丹羽が述べる用法の一つと言えそうである。ただし、ランドマークを知らない話者が対象の存在を否定する場合については、これまでの理論で説明できるのか検討する必要がある。また、丹羽の用法でメタ用法の使用が説明できる場合もあるが、述部で意味・指示対象を問い・与えているにもかかわらずメタ用法が使用されていない場合もある。この違いは何によって生じるのか検討する必要がある。また、今回はその傾向は見られなかったが、田窪[1]が述べるように、対象を直接知っているか否かでメタ用法の使用に違いが生じる場合があるのであれば、それはどのような状況なのかについて、他の会話データを用いた分析が必要である。

文献

[1] 田窪 行則,(1989)“名詞句のモダリティ”,日本語のモダリティ, 仁田・益岡編, pp.211-233.
[2] 田窪 行則,(2002)“談話における名詞の使用”, 複文と談話,4 章, 岩波書店,pp.191-216.
[3] 丹羽 哲也,(1994)“主題提示の「って」と引用”, 人文研究 大阪市立大学文学部紀要,Vol.46, No.2, pp.79-109.
[4] 堀内 靖雄, 中野 有紀子, 小磯 花絵, 石崎 雅人, 鈴木 浩之, 岡田 美智男, 仲 真紀子, 土屋 俊, 市川 薫,(1999),“日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴”, 人工知能学会誌,Vol.14, No.2, pp.261-272.
[5] 川端 良子,(2019)“地図課題対話における参照導入方法の特徴”, 言語資源活用ワークショップ発表論文集,vol.4, pp.139-148.